

第4回 むのたけじ反戦塾・拡大学習会 手元資料



- 日時 2023年8月26日（土） 13時30分～16時50分
- 会場 文京区民センター3A会議室

【プログラム】

13:00 開場 13:30 開会

- ① 参考上映『100年インタビュー「ジャーナリスト むのたけじ」』（後半45分）
- ② むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』
・これまで3回の読書会のまとめ、読み合わせと話し合い（60分）
- ③ 参加者、それぞれが今考えていることの出し合い・話しあい（60分）
・いま、反戦に向けての活動・行動を踏まえて

参加費：1000円 学生・若者:500円

【この手元資料の内容】

- 資料① 第4回 むのたけじ反戦塾のプログラム P.1
- 資料② 第4回反戦塾によせて 武野大策 P.1
- 資料③ 「むのたけじ反戦塾」へのメッセージ P.2
中帰連／不戦兵士・市民の会／
PCP 徳川の平和を知る・考える・伝える会
- 資料④ 第3回むのたけじ反戦塾
（2023年7月6日）の参加者発言記録 P.3～9
- 資料⑤ 「希望は絶望のど真ん中に」 P.12～10
第2章 農耕の中からはなげえ戦争が（後半）

むのたけじ反戦塾

問合せ先：090-4599-5314
〒338-0006 さいたま市中央区八王子4-7-10-201
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

第4回目の「反戦塾」は、2016年にむのたけじさんが亡くなって7年目の月にあたるということもあって、少し大きい部屋で「拡大学習会」とさせていただきます。

私たちは、むのさんの著作、出演映像作品、直接・間接にむのたけじさんを知る人の話を聞くことなどを手がかりに、反戦への思い、反戦への自分たちの考えを出し合う形の学習会を続けています。

むのたけじさんが有明の憲法集会で、反戦を強く訴えるアピールをして7年目になります。「すでに戦前である」と言われるように、戦争が始まる危機はさらに大きなものになっていますが、多くの人はそれに気付いてさえないようです。

私たちは第4回目の「むのたけじ反戦塾を「拡大学習会」として「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」の実現に向けて、自分たちが何が出来るか、それぞれの考えを出し合っていきたいと思えます。

今の危機的な状況の中で進めていくためにも、それぞれの知恵を出し合って、声にしましょう。

*今回の「反戦塾」は、「拡大学習会」として、「戦争をやらぬ、戦争をさせぬ世に」を、少しでも実質的な行動に結びつけていくために、さまざまな形で「反戦」の活動に取り組んでいる人たちに声をかけていくことを考えました。

準備不足もあって十分には用意できていませんが、今後も取り組みを続けて、広げて、つながりをもっていきたいと思えますので、どうぞご自分の活動、あるいはご存知の反戦に向けての活動をご紹介ください。

第3回 むのたけじ反戦塾

日時：2023年8月26日（日）13:30～16:30

会場：文京区民センター3C会議室（30名）
（地下鉄春日駅2分・後楽園駅5分）

プログラム（予定）：

① 参考上映『100年インタビュー「ジャーナリスト むのたけじ」（後半45分）

- ・第3回反戦塾（7月6日）にこの映像番組の前半を見ていただきました。今回はその後半、むのたけじさんの熱のこもったお話を聞くところから会を始めたいと思えます。

② むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』

- ・これまで3回の読書会のまとめ、読み合わせと話し合い（60分）
- ・これまでの3回の「反戦塾」で話されてきたことをまとめさせていただきます。
- ・今回の『希望は絶望のど真ん中に』は、第2章「農耕の中から何ゆえに戦争が」後半部分。その6ページをこの手元資料後ろに転載させていただいています。裏表紙からご覧ください。

③ 参加者、それぞれが今考えていることの出し合い・話しあい（60分）

- ・いま、反戦に向けての活動・行動を踏まえて
- ・自己紹介です。それぞれの今考えていること、問題だと思っていること、そして「戦争をやらぬ、戦争をさせぬ世に」するためにどう考え、それをどう力にしていっていか知恵を出し合います。
- ・こんな活動を知っている、それをやっている人の話を聞きたいと思うこともそれぞれ出し合ってください。次回以降も続けていきたいと思えます。

※参加希望者をご連絡をお願いします。
問合せ先：090-4599-5314 武野
E-Mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

第4回反戦塾によせて、

第3回反戦塾が終わって、1ヶ月くらいの世の中動きをみる。地球規模のお話で言えば、7月下旬に2023年7月は「観測史上最も暑い月」になるとの見通しが世界気象機関（WMO）により示された。これを受けて、国連のグテーレス事務総長は記者会見で「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代（the era of global boiling）が来た」と述べた。日本でも、120年間分析した気象データから、今年の日本の七月の平均気温が25.96度と最も暑かった年になったと気象庁から報告されている。

もちろん気象変動そのものも恐ろしいことですが、すぐ近くで懸念されることは農作物への影響です。そのような時に、「世界の穀倉地帯」と呼ばれるウクライナで激しい戦争が繰り広げられているのです。しかも、ロシアは黒海での穀物輸送を妨害し、穀物輸送関連施設を攻撃しています。これではますます食糧危機が深刻になるのは必至だ。こうした事態でも、国連のグテーレス事務総長は戦争をやめさせようという発言は放送されませんでした。

作物はタネを植えればすぐできるものではないのです。食糧危機になってから騒いでも遅いのです。それを考えたら、ウクライナ戦争はすぐにやめなければならないとだれもが思うのではないかと。そして、その原因と考えられる地球温暖化についても地球規模で真剣に議論しなければならない。

しかし、このウクライナ戦争で世界がいくつかの陣営に分かれはじめており、かつての東西冷戦時代に逆戻りしはじめてるように見える。陣営に分かれてしまえば、議論して、互いに譲り合うことなど難しくなり、地球温暖化の問題も放置されたままになるような気がして、なんとか停戦して、和解できるようになってもらいたいものだと思っている。地球温暖化だけでなく、新型コロナウイルスの問題にしろ、いま地球規模で考えなければならない問題ばかりなのです。だから、互いに話し合える環境を常に保つには「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」にしなければならないのです。

今、ウクライナ戦争で停戦の話をもちだすと、この戦いはロシアがウクライナを侵略したのだから、ロシアを懲らしめないとできないという人がいる。それに対して、いや、ベルリンの壁崩壊後NATOの東方拡大があったからウクライナに攻め入ることになったなどと反論する人もいます。それらはそれぞれの立場に立てば正論だと言えるかもしれない。しかも、いま日本国内での論争はほとんどそれになっています。しかし、この論争をつづけることは、どちらが勝つか負けるかのところまで戦わねばならなくなると思う。実際、ウクライナはロシアを駆逐しようと、自国兵などのF16戦闘機訓練をヨーロッパ各国だけでなく、アメリカ国内でも実施しようとしています。このようにエスカレートさせていくと、最後には核爆弾の使用になるのでは。だから、それぞれの主張の良し悪しなどを討議していたら、とんでもないことになると思うのです。だから、ロシア、ウクライナ双方に戦争をやるにはどうしたらできるか考えることが大切です。

参考になるのは1955年から1975年まで行われていたベトナム戦争です。最終的に北ベトナム側が南ベトナムの首都に攻め込むことで終わったので、表面上は力の勝負で決まったように見えます。しかし、世界的なベトナム戦争反戦運動の広がり、アメリカ政府がより強力な武器を使えなくし、増派もしくしたことが終戦に向けた動きを強めたことを見逃してはならないと思えます。

そのことを考えると、いま私たちは反戦運動、非戦運動をし、すなわち、「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」に向けた運動を地道にしていくこと、それしかないと思うのです。とりわけ、日本は憲法でそのことを歌っているのだから、尚更です。そして、人類が今後も繁栄するにはこの道しかないと思う。
(武野大策)

※今回、「拡大学習会」として、「反戦」運動・活動を続けている団体、グループ、個人の方にこの「むのたけじ反戦塾」の案内をさせていただきました。そのそれぞれの取り組みを教えてください、これからもつながりをもって拡げていきたいと考えました。お返事をいくつかいただきました。今後よろしくおねがいします。また「戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ」実現のため仲間を紹介ください。

受け継ぐ会 神奈川支部

私たちは、中帰連の精神と活動を受け継ぐ活動をしている者です。

第4回むのたけじ反戦塾・拡大学習会の開催に、心からの連帯と賛同をお伝えします。

中帰連とは、中国から帰国した日本人戦犯が結成した平和団体です。彼らは、戦争中の自身の加害行為を日本社会に伝えることを通じて、戦争と加害を繰り返さない平和な社会を生み出そうとしました。私たちは、2000年代はじめから、その精神と行動に学び、受け継ごうとしました。残虐で生々しい加害の実態を戦争体験者から直接聴き取ってきました。その中で、被害者・被害国に対してその責任を果たすことは、戦後世代のわれわれの責務でもあると考えてきました。

「戦争のいらぬ 戦争をやらぬ世へ」というむのたけじ先生の渾身の思いは、私たちが学んできた元戦犯たちの最後のメッセージと重なり、胸を打ちます。台湾に向いて中国との戦争を煽る政治屋が、堂々と国民の代表であり続けています。平和市民の力量が試されています。「戦争のいらぬ 戦争をやらぬ世へ」という思いが社会全体の強い意志となる必要があります。戦争をしない、平和を勝ち取るという課題は、「親中派」とか「護憲派」といった枠を越えた普遍的な目標です。皆さんと共に歩んでいければと願っています。

2023年8月20日

PCP 徳川の平和を知る・考える・伝える会

私の「むのたけじとの出会い」は59年前のことでした。むのさんの『たいまつ十六年』を読んだのです。

当時、高校2年生の私は、数か月前に読んだ『南ヴェトナム戦争従軍記』（岡村昭彦著）に感化されていただけに、むのさんが書かれた文章から伝わる凜とした姿勢に共感したのです。

それから4年後にそのおふたりが出された『1968年：歩み出すための素材』を常に持ち歩いたものです。

それだけに、むのさんは私の平和を求めて歩く道を「たいまつをかざして」導いてくださっているようで、1995年の「岡村昭彦の会」でお会いした時にはそんな話をしました。

11年前に愛知県岡崎市に帰郷した私に、今度は「徳川家康との出会い」がありました。それまではどちらかと言えば家康に批判的でしたが、研究してみると「世界史上最高の政治家」であることに気がされました。

そして6年前、「徳川の平和」（パクス・トクガワナ）を普及させたいとの思いからそれを企業理念にした会社を起こして今春、『徳川の平和を知る・考える・伝える』会を発足させました。立ち上げシンポジウムには、武野大策さんも足を運んでくださっています。

これをお読みの皆さまにはお見知りおきの程よろしくお願ひ致します。

不戦兵士・市民の会

「不戦」旧日本兵の誓い 次代へ

高齡化で生存続困難 新団体が継承

28日・さいたま キックオフ講演

戦場の実相伝えた軌跡「世に問う」

「不戦」と呼ばれるのは、戦後70年経った今もなお、戦争の記憶を語り、平和を訴える人々です。彼らは、戦争の被害者であり、加害者でもある。彼らの経験は、戦争の残酷さを伝える貴重な証言です。このシンポジウムでは、彼らの経験と、平和を築くための取り組みについて、詳しくお話しします。

講演者：大石 学さん（東京学芸大学名誉教授・時代考証学会会長）

基調講演：浅井久仁臣（ジャーナリスト・PCP代表）

パネルディスカッション：

- ハネルディスカッション 大石 学さん
- 「不戦」著者 岡村昭彦さん
- 「不戦」著者 武野大策さん

日時：2023年8月23日 日曜日 13:30 - 16:15

会場：岡崎市図書館 交流プラザりぶら Libraホール 岡崎市厚生通西4丁目71番地

参加費：一般2,000円 学生500円 高校生以下は無料

ご予約はPCPへ

お問い合わせ先：徳川の平和を知る・考える・伝える会

お電話 0564-77-5839

又は QRコードから

徳川の平和を知る・考える・伝える会

家康公平和を築く

PCP

Promotion Center For Pax Tokugawana

設立記念シンポジウム

徳川の平和から学ぶもの

朝鮮通信使と徳川平和

記念ビデオ・メッセージ 大石 学さん

基調講演 浅井久仁臣

パネルディスカッション 大石 学さん、岡村昭彦さん、武野大策さん

日時：2023年8月23日 日曜日 13:30 - 16:15

会場：岡崎市図書館 交流プラザりぶら Libraホール

参加費：一般2,000円 学生500円 高校生以下は無料

ご予約はPCPへ

お問い合わせ先：徳川の平和を知る・考える・伝える会

お電話 0564-77-5839

又は QRコードから

後援：岡崎市、岡崎市教育委員会、岡崎商工会議所、おかげさき 株式会社東海新聞社

主催：BRIDGE FOR PEACE 株式会社ディープ・ジパリン

資料④ 第3回むのたけじ反戦塾（2023年7月6日）の記録（1）



※「むのたけじ反戦塾の記録」は、毎回、参加者のみなさんの話されたことを書き起こして、次の回の手元資料に掲載させていただいております。ひとりひとりが、今考えていること、問題だと思っていること、あるいは「戦争はいらぬ、戦争をやめ世へ」という反戦への思いを出し合うことが最も大切だと考えているからです。

また、みなさんのお話したことを書き起こし、記録とすることを通して、この「反戦塾」に直接参加していない人にも、みなさんが考えていることを伝えていくことが出来ると考えてます。

しかしながら、録音したものをから書き起こしているのですが、採録者の知識と教養の無さから、よく聞き取れなかったり、わからなかったりしたところがあります。採録しながらもこれは間違いではないか、と思いつながら文字に起こしているところ（？）や（***）で表示があります。

ご自分の発言と思われるところで、間違いがありましたらお知らせ下さい。修正して正しい記録としていきます。

※また今回、書き起こしに時間がかかってしまって話合いの前半部分（それぞれの自己紹介と「今考えているところ」の部分までしか掲載出来ませんでした。後半部分も書き起こして追加掲載をして行きたいと思っておりますのでご了承下さい。

【参加者・自己紹介+私が今、考えていること】

●司会（男性）

今回は3回目になるんですが、今日初めての方もいらっしゃるかなと思いますので何回も繰り返していることなんですけれども私達、武野さんと私なんですけれども、どういう風にこの会話を始めたかについて短くお話しさせていただきます。

私は、「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」を2回目からお手伝いしたことがありました。その時にまあそういう賞を設けてやっていくということはすごくいいことだなと思ったんですけどもそれと同時にむのさんの名前ってのは聞いていたんですけどあまり知っていませんでした。だから、むのたけじさん、とくに2016年有明の憲法集会で話された内容を映像で見せていただいたんですね。いわゆる「戦争をなくす」と言いましたか「戦争をさせない世の中へ」ということで動かれてきたことをもうちょっと知りたいなと思いました。武野大策さんにお話しをお聞きしたりして、「自分たちでむのたけじさんのことを知る学習会のようなものをやっていけないか」ということを考えました。

皆さんも多分同じ考えでいらっしゃるかなと思うんですけども、今すごく戦争の危険っていうのがですね、近いところにあると。にもかかわらずそれに対して報道とかで、問題にされることなく、なし崩し的に軍拡とかそういったことが進んでいく。その中でどうやって新たに戦争に反対するっていうことですね。それを戦争させないということをどう動くかを作っていくのかっていうことがやはり自分たちのテーマとしてもっと考えていきたいということが1つあります。それと同時にむのたけじさんの著作とか、あるいは残された映像とかそういったものを見ながらあらためて自分たちみんな意見を出し合って考えていきたいと思ったのです。

もう一つの側面としてむのたけじさんが、それを一つの活動と言いますか、活動にしている方法論と言いますか、やり方って言うものをちょっと学んでいけないかと思いました。むのさんは終戦と同時に朝日新聞社を辞めて、秋田に帰っていわゆる『たいまつ』という新聞を作ってそれを基本にして言論活動と言いますかあるいはそういった学習活動っていうのを展開していったその中ではやはり一番大切なことは一人一人が考えていくこと、一人一人が声を出して思っていることを発言するっていうところがあるということを教えてくださいましたね。

えらい先生に来ていただいて、先生のお話を聞くっていうのはもちろん大切なことですし、映画・映像を見ていくと、いうことも大切なことだと思うんですけどもそれとともにやはり一人一人の方が今考えていること、「今、これは問題だ」と思っていることを出し合っていくっていう形の勉強と言いますか、そういう形での学習会っていうのを作れないかということを考えてました。

むのたけじさんも、「むのたけじ平和塾」という秋田の方で実際に車座になってですね、みんなで学習し合うって言う会を作られていたということですから、そのことと先ほど言った「今こそ反戦を」という「むのたけじ反戦塾」と名乗ってですね、この会を始めようということで昨年の12月から1回目 3月に2回目っていう形で始めました。

そういった中でむのたけじさんの書かれた本を一部コピーしながらですね、読んできていただいて、目を通してきていただいて、どういう発言があったかということをごにきていない方にもですね、伝えていけるようなそういうふうな会を作っていくことはできないかというところです。今、試行錯誤の途中なんですけれどもいろいろ至らないところもあって申し訳ないんですけども、ぜひ今後ともそういったことでよろしくお願ひしたいと思っております。

今日の話の進め方なんですけれども一番最初に皆さん一通り自己紹介と言いますかただ自己紹介ももう3回目ですので、同じことを何回も紹介しなくてもよい方は、名前と今、自分が一番問題にしていること、考えていることを一言言ってくれ、あるいは、今はとくにこの「反戦」っていうことがテーマなもんですから、そのことについて「こんなところでこんな話を聞いた」とか、「こんな映画を見たよ」とか、あるいは「こんな本を読んだ」とかそういったことも交えながらですね、前はコスタリカの非軍事の話についての紹介とかですね。いくつかのその平和会議の活動であるとかそういったことで紹介してという形でもですね 織り混ぜてお話しただければと思っております。

また それに加えてその後ちょっと予定していますむのたけじさんの『希望とは絶望のど真ん中に』っていう本を一章ずつ読んでいくんですけども、そのことについては前回話したことに関連したもので結構ですので、まあいろいろ思っていることを考えられていることをお話しただければと思っております。（9：02）

●K.I.（女性）

どうぞよろしくお願いいたします。先日 松戸の方で三上智恵さんの沖縄のスピノフ上演会がありましてそこに参加しました。それとあの石垣島に二泊で行って来ました。私も行ったんですけども、その自衛隊の抗議活動のその報告会を兼ねて行いました。その時にスピノフ上映をした時にDVDですか、それを操作してくださったブコの方かなよくわからないんですけど、その方があの意見をちょっと言われたんですけども「このウクライナの戦争は違うんだ」っておっしゃったんです。「他の戦争とは違うんだ。このウクライナの戦争は今やめたらいけないんだ。今やめたらウクライナは滅亡する」って。私も含め皆さんも賛否の意見は誰も出ませんでした。私は「えっ」と思って、一瞬考えが止まったみたいな感じで、ちょっとしばらくしてから、「ウクライナは滅亡するっておっしゃったんですけど それはウクライナという国家体制が滅ぶのか、それともウクライナの民の人たちという風に考えた時にちょっと なんか違和感があったんですけども、それをこれから私なりに考えていきたいと思うし、皆さんがもしよろしければ一緒に考えていただければと思います。よろしくお願いいたします。（11：06）

資料④ 第3回むのたけじ反戦塾（2023年7月6日）の記録（2）

● T.T.（男性）千葉から来ました。今の松戸の集会行きましたんで一言だけ。実はですねその時何も言わなかったんだけど、集会の名称はあれでいいのかなと半分ぐらい実は思ってたところがあって、どういふ名称だったかっていうと今探したんだけど見つからないので記憶だけで言いますけど「新たな戦前が始まっている」というタイトルの集会なんです。新たな戦争が始まっているっていうことは、戦争に向かっていくしかないってことで、戦争を止めることは出来ないよって言うようなタイトルの付け方で、実は半分位思っていて、映画を見たらすごく面白かったんですけど…みたいなことを考えました。きりがないので後、必要があったら喋りますけど必要がなかったら喋りません 以上ですね。（13：30）

● T.K（男性）よろしくお願ひします。朝鮮学校の支援をしていまして。今年は関東大震災の100年と言うことで、いろんな催しがあるんですけど、自分もその小学校の時から災害の日と言うことで、そういう行事があって、地震と火災とかいろいろ講演とかあったわけです。でもそういう負の面というか、恥ずべき大虐殺が行われたと一切知らされてませんし、そのことって言うのが大切なことで、このことをしっかりと受け止めないといけないんじゃないかなと思ってます。毎回、私も最後の有明の集会で、最後のむのたけじさんの話を聞いていたひとりなんですけど、やはり名前以前から存じ上げていたのですが、武野大策さんが、たけじさんといっしょにつくられてきたものというか、これからまた勉強させていただきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。（14：09）

● H.I.（男性） 東松山、埼玉県の東松山から来ました。花崎さんには 前回紹介しましたコスタリカの非軍事化の紹介をですね、内田さんという先生が要約されたコスタリカの非軍化の文章があるわけなんですけど、それを短く、できるだけ分かりやすく「比企丘陵から」という私たちが出しているミニコミ紙に紹介しました。今回は15ページに、「比企丘陵から」に載せてあるコスタリカの非軍事化が載せられていますので、電車の中でもよくお読みいただければと思うんです。ここでは、詳しくこの紙面では紹介できていないんですが、1つだけ僕の言いたかったところがあるんです。それは「1ドルのお金を何に使う？ 社会福祉に使うの？ それとも文化事業に使うの？ それとも戦争に使うの？ あなたはどうするの？」っていうような話をですね、コスタリカでお母さんが小さい時から自分の子供たちにですね、そういう問いかけをしながら話をしてる。私たちは戦争反対とか 反戦ビラとかそういう反戦活動をやるわけですからでもコスタリカからもう一つこの点が、家庭の中でですね、「1ドルのお金があったら、それをどういふ風に使ったらいいんだろうか」と子どもと話をしている。僕の家だと言うとそういう風にはなっていない。日本の家庭におけるお母さんと子供の関係性ですね、お母さんに子供にどういふ話をして、どういふコンタクトをとるか、その辺 コスタリカから学ぶ必要があるんじゃないかと思うわけです。いわゆる日常的にもコスタリカの民衆がどのように生きているかというところの中にですね、コスタリカの非軍事化が可能にされてきた大きな力があるんじゃないか。それから日本は軍事大国に加速してるわけなんですけど、殺傷能力のある兵器を輸出することが可能にするのを勝手にですね 国会の論議もなく進めるってことは どんどん行くわけなんですけど、それに対してどうしたらいいのか、私たちはやっぱり私たちの日常生活の中で、やはり気づいたことをまずは家庭の中で、お友達との関係の中で、自分の生活の中でそれを取り返して行くってことが必要ではないかと。

武野さんの資料を読ませていただいたらですね、3つの禍がある。1つは病気であり、貧困であり、1つは戦争である。貧困と病気っていうのは個人が作り出すものではない。だけど戦争は人間が作り出すものであるならば戦争をやめようということですね。貧困や病気をなくすというところで、戦争が行われない平和な社会 築けるんじゃないかんじゃないかかっていうむのたけじさんの指摘があるわけなんですけど。抗議集会も必要だけれども私たちの目の前のことから取り組んでいく必要があるんじゃないか、そしてきょうむのたけじさんの資料を皆さんが読んでいろんなご指摘があると思うんでそれを聞きながら今日は勉強させてもらうことを楽しみに参加させていただきます。（19：20）

● M. K.（男性）さいたま市から来ました。第1回目は参加したんですけど、第2回は参加できなかった。個人的なことなんですけど毎年確定申告をするわけですね、それがWebでもってやれないもんで、税務署でもってサポーターが付いてやらせてもらっているんですね。申告が終わったところでホッとしたところで、待ち構えている人が「マイナカード作ってないからつくりましょう」普段はマイナカードにしたらいろいろあってと否定的なんですけど、なんか、その場のあれでもって作ってしまった。それからあの、自分の中で、負担になってしまっていたんですけど、最近朝日新聞かな、マイナカードの返還が多くなっているという話を聞きまして、ああそうか、返せばいいんだと気がついて実際返してしまっただけなんですけど、それで終わったわけじゃなくて、またこれからもマイナカードをどうするかという問題、大きな問題だと思っています。まあむのたけじさんの話とは直接関係ない話で申し訳ないんですけど、今日はいいろいろ教えてもらえればと思うんです。（21：40）

● I.Y.（女性） 世田谷から参りました。この前は出られなくて、1回目は出たような気がするんだけど手帳見ないと分からない。そういう 87歳の年金暮らしです。ほとんど毎日出かけているのは 裁判所に出かけてることが多く、何の裁判かというのと、原発からリアアから普通の都市計画道路までものごくいろいろな裁判があります。傍聴席がいっぱいになると少し 裁判官が気を引き締めるらしくて、弁護士が「勇気づけられるから来てください、来てください」っていうので、もう毎日ほとんど裁判所におつとめしているみたいに傍聴に行っています。いまちょっと新聞なんかでもちょっと行動が足りないと思うのは「種子法」っていうのが廃止になってそれがいるんなことで問題になっても、これからの日本の食生活がどうなるか、農業がどうなるかっていう大問題なのに知らない方が多いんですね。裁判は一審では敗訴でした。その控訴審は秋になると思いますが それまでにとにかくこのことがとてとても大切だっていうことを毎日のようにあちこちで宣伝しまくっております。よろしくお願ひします（23：27）

● K.S.（男性）日野市から来ました。むのさんとの出会いは、学生時代に 1967年だと思うんですがたまたまの講演を聞いたのがもうものすごいショックでそこからすっかり ファンになってしまったということで、新聞「たいまつ」を購読し始めたりと、そんな関わりからだったんですけど、岩波書店に入ったものですから、いろいろ仕事の面でもお世話になって、今日の章の前半を読んで『希望は絶望のど真ん中』に、これについて、最初のあたりで関わったということです。途中で定年退職になっちゃったから12年前に退職する少し前から後輩に担当を任せました。けれども そんな風な形でお世話にもなりました。それと その戦争関連で最近、見たり聞いたりしたこと で ちょっと2つだけすごく 印象的だったことがあるんです。簡単に申しますと、ひとつは NHK テレビで5月末に放送されたんですけど「映像の世紀」っていう「バタフライ・エフェクト」っていうシリーズの中で、ベトナム戦争っていうのをやったわけです。私なんか 完全にいわゆる団塊の世代で、あのベトナム戦争というもので世の中の見方が、がらっと変わったということですね、そういう感じがあるもんですから未だにベトナム戦争って何だったんだらうって、こう気になったりするんですよ。マクナマラという人がですね、まあ国防長官として7年ですか、ベトナム戦争を進めたあの人のことを徹底的に、表や裏で描いているドキュメンタリー、私にはものすごく面白かったというか、こういう人だったのか、とんでもない嘘をついたりいるんなことがあるわけですけども、まあとにかくご覧になった方もいらっしやると思うんですけど必要でしたら後でまたあの具体的なことは申しますけど そんな印象深い映像だったというのが1つと。（次ページにつづく）

資料④ 第3回むのたけじ反戦塾(2023年7月6日)の記録(3)

もう1つは全然違うんですけど、つい最近ある講演会でですね話を聞いたのがなかなかよかったんです。それは柳澤協二さんというこれをご存知の方多いと思うんですけど、今70代半ばですけどあのずっと防衛官僚だったからですね。防衛関連のほとんどトップまでいったという方で、防衛研究所長とかですね、そういうのもやったり、で一番大きな仕事としてはイラクへの自衛隊派遣ですね。2004年ですか、あの時のほとんど責任者として首相官邸につめて動かしていったという、そういうことをやった柳澤協二さんが、今では今のその防衛政策にも安全保障政策にも、すごく批判的なわけですね。いろいろ発言されている。私はいろんな話が面白かった中で、印象的だったのは、何がきっかけでですね、どうしてそういうふうなスタンスというか、もの見方が変わったのかというきっかけを知りたかった。それをストレートに押しちゃったんですね。何かというとこれがまさに自衛隊派遣、あれは延べで10000人の自衛隊員がサモアですか、あそこに行っていた、でももちろん一人も死ななくてよかったんだけど、非常に危ない局面があった。もしも、ひとりでも自衛隊員が死んだとしたら、自分はそのその母親に面と向かって何と言えたんだろうかと、で、それを考えてしまった。もちろん防衛官僚としてのセリフはもういくらでもある。だけど、人として言うべき言葉がないという、そういう辛さっていうか、悩ましいことをずっと考えるようになってしまった。まあ一方でプーチンがですね、あのウクライナで(息子が)亡くなった母親に対してとんでもないことを言ってる。つまり「人は誰も死ぬんだとどう生きたかが大事なんだ」という風なことをヌケヌケと言っているというのはもう、とてもじゃないけど許せないと思った。そういう柳澤さんの話を聞いて防衛官僚であれだけ重要な仕事をしている方がそういう感性っていうか、感覚を持っていたのかっていうのがものすごく驚いたというかですね、感動した、そういう感じがありました。その2つがちょっと印象的なことですね。(28:26)

●K.S.(男性) 目黒から来ました。私の方も裁判所によく行くんですけど、この…731の人からもらったんですけど、一部づつ回して取ってもらえますか。それとウクライナの件ですけど、去年の3月9日に港区の異業種交流会と言うところでウクライナ系ロシア人に会ったんですよ。でその彼女が言うにはプーチンが言うことをゼレンスキーが聞かなかつたから戦争になったということです。ソ連邦が崩壊するときに彼女はモスクワに留学してウクライナ人だったけどロシアのパスポートがもらえらるということで、「私はロシアのパスポートを選んでそれで今日本で来ています」ということで、もう40何年も経ってるんですけど51回近くも。それでそのことを言ったらまあ他の人みんなプーチンが悪いと言うことなんですけど、彼女が言うにはその国籍が選べてロシアでウクライナでも出してもいいとなるし、ゼレンスキーにしてみれば、南のクリミア半島、東にはベラルーシとの国境に、沿ドニエストル共和国ってロシア人が強制的にも独立国家を作ってるんですよ。そういうことで北には親口派のベラルーシがあるし、そういうことでプーチンは、今回の東部ウクライナの党が認めることをできなくて。戦争可能、戦争じゃなくてですねウクライナ中心の楽器弾いてる人ですけど、13世紀からのバンド弾いてる。その彼女が言うには、ウクライナは戦争をしているんじゃない、ロシアから守っていると、彼女は言っていました。だからそういうこといろいろ意見があるんです。どれもどういう風に考えたらいいかなと思ってるような感じです。(31:55)

●D.M.(男性) さいたま市から来ました。私はいつも漢字の武野といいます、ひらがなの「むの」も同じ武野で、父親になります。大人になるまで、漢字の武野と、ひらがなの「むの」は違うと言っていましたけれども、なぜか介護で面倒見なきゃいけない時はそれができなくなっちゃってしまいました。それで私が、今思っているのは、私自身ベトナム反戦戦争の時は幼く、田舎にいたってこともありますが、直接関わり合うことも少なかったんです、ベトナム戦争であれだけ日本中が反戦、反戦ってやったのに、なぜこのウクライナ戦争で反戦って言わないんだってとてもそう思うんです。何にもウクライナが特別な戦争じゃないです。何が起るかわからない戦争でしょ。

今となったら原発を爆発させるかもしれないっていったらヨーロッパ中が被害を被る、ウクライナだけでなくウクライナ、ロシアだけでなくヨーロッパ中が困るって。それでいて誰も反戦とか、休戦とかって言わないということ自体がとても私最近不思議に思います。それは何かって私やっぱりマスコミが悪いんじゃないかなってすごく思う。戦中、最初の文章に書いたから言わなくても良いかなんて思うんですが、ちょこっといいます。戦時中の報道の責任ってというのは戦意向上、「戦え、戦え」っていうのと、それから被害を過小に評価したっていうことです。今ウクライナで行われていることは両方ともやっているでしょ。要するに日本だから関係ないとは言えないと思うのです。日本の報道だから関係ないとは言えないはず。もしあれをこんなバカ臭い戦争だって報道していたら、もうちょっとベトナム戦争みたいな反戦運動が起きていたと思うんです。私はこの会がそういう方向に向かっていったらいいんじゃないかと思いを少し持っています。以上です(34:40)

●Y.S.(女性) 戦争始まって、誰も「反戦」を言わないって、それは違うんじゃないのって思いました。大きな声にはなっていないけど。私も始まってまもなく、渋谷駅前での反戦デモに参加したけれども、あの広場越えて道玄坂いっぱいになっているかと思ってたけど、広場で100人、200人いたかしらと言う程度で、議員はひとり、福島みずほさん1人いらっしゃっていましたが、あと、原発関係もいらして、女性が多かったんですけど、ただ大きな声にはならない。そしてだんだんやっぱり侵略した側に対して戦うのは当たり前じゃないって声が大きくなったように思います。そして日本が同じようなことになってはいけなくて日本が例えロシアとか、中国とか北朝鮮、それにウクライナのその舞にならないために、日本もやっぱり備えなきゃいけないとの前から***が言っていましたけど、さらに1度とギアを上げてっていう感じで大増税ですよ、5年間で43兆円、攻められてもいいようにと、というか攻撃自体とかそれから敵基地攻撃能力これ反撃、反撃と言いつつ換えましたけれども、これって相手が国土に入っても相手も攻撃する素振りを見せたら先に叩け、叩いてもOKってことですよ。これは防衛の範囲を超えてんじゃないの、自分の国土に入っていない？で、どんどんミサイル増強して、米軍も、沖縄や石垣島、南西諸島、先島、北海道も配備を変えて、自衛隊も利用して、つまり日本全土そうなりつつあります。攻撃されたらっていうことで、自衛隊の地下化も進められていますし、これ週刊金曜日、最近ですけど、これだと、三上智恵さん、沖縄の映画を作ってる、ドキュメンタリーを作ってる、これも進んでいるんだけど、とても追いつかないので、やはり危機感感じて、まだ途中だけど、是非上映したいって言う声が多くて、今上映進められているらしいんですけど、上映すると、泣く人がいると、だけどそれを沖縄や南西でやると、泣く声も出ない、それだけ、もう危機感、もうほんとにリアルに迫って来ているんだと思うんですが、でもそれは攻撃がリアルって言うんじゃないで戦争を想定して、しなきゃならない準備、良く軍拡、核軍縮の際に言われてきましたけど、アメリカもソ連も、もう地球何十回も破壊するだけ核軍備をして、そんなのバカバカしいと、経済も疲弊していくということで話し合ってた減らしていきました。が本当にだって相手が備えるとそれに対してまた備えろとどんどんどんどん安心ってないですよ。相手が軍拡するとそれに対抗すると本当に際限がないそれをやると、しかも経済がアメリカを超え間もなく超えるって中国に対して一体どれだけ軍拡すれば安心と言えるの、叩いたらまた叩かれるに決まっていますし、アメリカ本土まで戦火が伸びることは絶対アメリカはしませんし、日本に在日米軍と一緒に自衛隊と戦っていると、日本のお金を使って備えさせると。そのねらいはって言うのは、同じ金曜日にジャーナリストの半田滋さんが書いていらっしゃいましたが、台湾の攻撃に備えているわけですよ、台湾、今、半導体が経済で、ずいぶん問題になっていますけれども、話題になっていますけれども、これからの社会、半導体が必要不可欠、とくに軍備については、先端技術については、そしてKSTCっていう世界ナンバー1の企業が台湾にあって、それが日本にも来ますけれども、台湾が占領されたら先端半導体工場、それが心配なんですよ、アメリカ、まあ日本もそうかもしれないけど、日本政府もかも。(次ページにつづく)

資料④ 第3回むのたけじ反戦塾(2023年7月6日)の記録 (4)

それにそういう戦争って言う背景に経済があり、それを私たち考えなきゃ。誰が得するの？誰が損するの？戦争って本当に最大の環境破壊だし、生命破壊、自然破壊されますよ。しかも原発、それがやられたらあるわけですから、それが攻撃されたらどれだけ、日本全滅です。ヨーロッパの人たちだけじゃなくて、世界中が汚染されますよ。あれだけの原発で。日本ももう50数基あるわけですからそれが攻撃されたら日本全滅です。たとえ生き残ったとしても放射能にやられますし、生物もほんとに。しかもどんな時代になるか。だから絶対戦争を起こしちゃいけない、で何という無駄遣いだ、なんという破壊だと思わなきゃ。本当にむのさんの、つい最近(資料が)来て全部は読んでいないんですけど、ほんとに、それに注ぐ時間とエネルギー、お金を病気や貧困のために使えばどれだけ社会が世界は平和になるだろうかと、ごく単純なことだと思わなきゃ。最大の破壊をする自然破壊、人類・文明の破壊をするのか、それとも貧困や病気撲滅の目的に時間・エネルギーを使うのか、それって私たちの意識が変わればできることじゃないのって。ウクライナ戦争は誰が望んでやったの？プーチンの頭の中は、その取り巻き、サポーターとか、ごく一部の権力者がそれを進めているでしようけど、私たちを変えなきゃいけないし、今日本で起きている、進められていること、これを止めるのはみんなが主権者である私たち、憲法に言われている不断の努力を私たちがしてやっぱり声にあげ続けた、政治的な意志表現もしなきゃと思わなきゃ。考える会とか懇談会とかなんかいっぱいありますけれども頭の中で考えているだけじゃダメ、やっぱりそれを言葉にするとか行動に表すとか別に過激じゃなくてもいいんです、これはおかしいっておかしいことおかしいっていい続けたいと思います、前よりも。社会に私たちはする、しなきゃいけないし、責任があるし、やっぱり希望を持てるような未来をつくらなきゃと思わなきゃ。今の若い人たちも、ほんとになかなか希望が持てにくいけれども、持てるような社会にしなきゃいけないと思わなきゃ。(42:30)

● M.T.(男性) これまでこの反戦塾には最初から参加させていただいております。それでこのところ考えているのはですね、入管法の改悪とか、LGBT理解増進法でしたかね、あれが全くウソで、性的少数者の人権を守らない、難民もですね、難民認定(申請)を今後3回すると強制送還、とまったく人権を踏みこじるような法案が通ってしまったんですね。国家公務員の高級官僚たちですね、東大を出て大変なエリートなんですけれどもなぜ国際人権基準から外れた難民のこうゆう法案を作ったりしたんですね、性的マイノリティの人権を踏みこじるような法案を作るのかな、と。これはあの自民党の保守派に言われるんじゃないと思いますね。官僚自体の考え方がおかしいと思わなきゃ。で、私は、1945年の8月15日で日本はがらっと変わっていないと思わなきゃ。世の中は空爆、空襲で焼け野原になったんですね。食べ物もないし、ただね。高級官僚たちは、天皇と共に生き残っちゃったんですね。戦前の高級官僚たちは丸ごと生き残っているわけですから、それでまあ民主主義という言葉が言われましたから、民主主義の仮面をかぶって内心は明治政府のその天皇制家制度を守るといのがですね高級官僚たちの暗然の使命(?)なんじゃないかと、その暗然の使命(?)がですね、いまだに続いて高級官僚たちにこの既得権益を守るといことと同時にですね、戦前の天皇制を存続させる意志を持っているんじゃないだろうかと。それから福祉医療も、年金もですね庶民の生活のことを何も考えていない、こうゆうのが基本的に戦争につながっていくので、今私は、戦後の敗戦の状況でいったい何があったのだろうってことをこの資料を見ながら勉強してみようという風に思っています。(45:49)

● Y.K.(女性) 1回目、2回目の時はお仕事呼ばれちゃいました、日曜日も仕事場に行ってきたことがありましてちょっと参加できなくて今日が初めてなんです。で、これが2、3日前に送ってきました郵便がなんかすごい時間がかかるところで、そこはどこかという横田です。横田基地。うちの2階に上がると2~3日前は(?)花火がよく見えるところに住んでおります。ア

今は水問題でちょっと地域が大変な取り組みをしていますけどもそこから来まして、きょう参加初めてでこれ読み切れないで、きょう参加させていただいて、失礼かと思わなきゃ。あの私は戦後生まれで今76歳なんですけども、いつまで勉強してるんだっていう感じで参加させていただいているんですけども、今のマイナカードなんかで言えばスノーデンさんっていう人が横田基地に5年間いたという話を聞いた時に情報をしっかり盗っていったという話を聞いた時に、あ、こんなそばで盗っていたんだって、日本人の情報ね。そんなこともあったり横田基地に孫があの小学校の低学年の時にうちに帰ってきて「おばあちゃん、おばあちゃん、大変大変!」「どうしたの」って言ったら、「これが飛んでいたよ」って言うんですよ。飛んでいたのはカクハン機(?)じゃなくて、孫でも分かる位低い位置に飛んでいたらしいんですよ。

そんなこともあったりそれからの地域では今、あの市政はどうなってるんだらうっていう横田基地もある、水問題もある、いろんな問題が起こっているのに市政はどうなっているんだらうって見た時に今市議会をちょっと傍聴し始めているんですよ。そういう中でもいろんなことがわかってきたしてそういう風に日々勉強しています。よろしくお願いたします。(48:24)

● F.O.(女性) きょうここに参加した理由は、みなさん、今どのように考えてるのかなあって、言うのをやっぱり聞きたかったんですね。私は今、7月16日に「新しい戦前にさせない」っていう反戦川柳と鶴彬と現代」これの、私たち東京鶴彬顕彰会っていうのが主催なんで、まだ5~6人しかいないグループなんですけど、2009年ぐらいの時かな、あの民医連、全国のお医者さんの連合会、その会長さんの訪(あざみ)昭三さんが「鶴彬の句碑は全国盛岡からあるんですけども、東京だけがないです。東京で亡くなっているんですけど。だから是非その句碑を立ててくれないか」っていうのは要望であったんですね。それをなんか受けたのが東京鶴彬顕彰会なんですけど、東京はやっぱり土地の問題とかも、とにかく環境の問題うさくて、全然実現ができない。だからその間に句碑はお金がかかるからとりあえず一口1000円でもいいから集めようということでお金だけは貯まったんですけど肝心の建てる場所がないんですよ。それでずっと悩み続けてきた。そこに今回ウクライナ侵攻がありましたんですね、それで一変に情勢が変わったっていうか、そのことで東京も変化があったんですね。今までが憲法っていうのはもう理想の何て言うかしらもう象徴っていうか、いかに保つていけば平和になるかということだったんだけど、それがいっぺんにガタガタと壊されていような感じが私は受け止めたんです。その時の10月にあの鶴彬の上映会をやりました。その時はあまりまだ関心は少なく、もう知るぞ知るしか言えないんですよ。それが今回佐高さんがご自分の、今まで調べてきたことを評論集に書いたのがこれだったんです。建ったこれ、せいぜい2cm位の厚さだ。でもこれがあるって、そこにウクライナの侵攻があったり、コロナで物価高になったり、いろんな要素があるって、今、鶴彬のブームなんです。今回ここ110席なんですけど、はじめて鶴彬を知ったっていう人が集まってくれた、それから中高年もいるんですけど、鶴彬を知って言う人じゃなくて、はじめて知った人、これがやっぱり新しい動きなんです。そういうことをやっぱり、反戦って言うのは、何なのかって言うのをとらえて、新しい段階とか、あの反戦活動の新しい段階が少しずつ入ってきているってことは、今まで頑張った人たちはなんだかんだ言うより、それを受け止めて活動した方がいいんじゃないかなって言うのを、私は素直に受け止めています。その一方で、デジタルで、5月の3日にレイバーネットをやったんですね、そしてらっいっぺんに3500人の人が視聴者になったんです。毎日少ずつ、少ずつ増えて3700になってます。そういう圧倒的にアナログより、デジタルの報が確かに効果はあるかもしれないけど、一人一人の意見を聞くっていうような活動が確かに効果はあるかもしれないけどやはりこういう何ていうか一人一人の意見を聞くっていうような活動がアメーバのように広がっていく方が、やっぱり反戦の活動には、一番なんか向いてるっていう、そうしてアメーバのような人たちが、いざって言う時に、どんと束になって言うのがいいんじゃないかなと思わなきゃ。(次ページへつづく)

資料④ 第3回むのたけじ反戦塾(2023年7月6日)の記録 (5)

これは宣伝のためじゃなくて佐高さんにサインもらったものだから。今までは本屋のすみっこの方にあったのが、今、平積みが一番前のところにあります。分かりますのでぜひぜひ読んで、「ああそうか時代が少し少ずつ変わってきているんだな」って、若い人が関心持ってくれたんだな—っていうのを思い出してください。

今年の8月の18日、19日に川越で「全国紙芝居まつり」っていうのあるんですね。それが完全にアナログなんです。全国から300名ぐらいの人が集まってくるんですけど一切デジタルに宣伝してません。私もその中で「とことん紙芝居」っていうのをエントリーしました。エントリーした題目は「東京大空襲」です。そういう人がいるかどうかは分かりません。とにかくキャッチフレーズは「遊べや、学べ、紙芝居」なんです。遊ぶ方が全体に多いんですけど。私はこの時だからこそ、東京大空襲の紙芝居、早乙女勝元さんがイシューのために作ってくださったなかなか素晴らしい作品なんですけどそれをやることにしました。「とことん紙芝居」っていうのはあちこちにあるんですね。(55:49)

● I.K. (男性) 埼玉の八潮市から来ました。詞集「たいまつ」からのファンで、ずっと武野さんを追っかけてたと、そういうんですけど、退職してからは、発電の仕事、原発の仕事(?) 同じようにやってきて、今でもやっているんです。

今回八潮市の母親大会でウクライナ戦争から平和を考えると、レポートしてくれないかと頼まれて、今レポートができてるところなんですけども、それを書きながら、私の認識が変わったんですけれども、最初ウクライナ戦争が始まった時に最初はびっくりしましたよね。21世紀の今日、こんなことがあるのかってびっくりしたんです。

その次にびっくりしたのは、ロシアの専門家とか、国際政治の専門家とかいわゆる専門家とまでがテレビで「びっくりした」と、こんなことは政治的軍事的合理性のないよって言い出したわけですよ。膨大な軍事力を集めて軍事演習だとか言ってたわけだし、それで戦争を始めるといふからには様々なデータがいっぱい出てくる。衛星から見れば15cm四方のものまでわかるというその時代にロシアがウクライナに侵略するという事を知らなかったというはずがないと少なくとも各国の政治のトップあるいはマスメディアのトップレベルの人たちは、そのウクライナ知ってたはずだと、だったらばなぜ事前に大キャンペーンを張ってロシアの侵略を止めるようなことをしなかったのかと、そこに大きな問題があるという風に今思っています。

それでさらに今うがった考え方からすれば、今の状況を見てみると血を流しているのはロシアとウクライナの人たちで、アメリカやNATOの人は血を流してない。だけれどもアメリカやNATOの軍事会社からは膨大な武器があそこにつぎ込まれている。最新の兵器もあそこに行っている。そしてもう古いその在庫一掃セールのために古い武器も行って、最先端の武器までが使われて毎日消費(?) されてるっていう状況が今あるわけで、そしてそのおこぼれをもらって、日本がミサイルを沖縄諸島に配備するトマホークを500発買うとかなんとか言ってるという。そういうこと見ると明らかに軍事産業が儲かる仕組みが今あってそういう状況があるってことを考えるとウクライナ戦争が始まるのを知っていながらNATOやその他のいわゆるトップの人たちは手をこまねいていた、もっと言えば始まらないかということのを待ってたんじゃないかとそういうことを今考えています。(59:25)

● H.N. (男性) 調布市から参りました。前回の文字起こしありがとうございました。5ページの最期の方にあります。会に入ってきたきっかけはですね、加害の歴史の映画を見たり、勉強したりということ。

最近の話をお話させてください。関東大震災100年、朝鮮人虐殺の話についてあちこちで講演があります。フィールドワークも行ったんですけど、あらためてその実態を見聞きして驚きました。講演の1つに新井さんと言う佐倉の国立歴史民俗博物館の文芸員の人がいて(朝鮮人虐殺の)絵巻を最近見つけて、その時の講演の話の中にですね、その展示をしようとした時に資料がなかったんですね。

探した資料で見つかったのが、1つが小学生の書いた虐殺の絵、図画の先生が描いていますので、その後最近見つかったのが、絵巻ですね。こういった会に出てくるのが、在郷軍人、自警団、警察官、その実態が描いてあるんですけど、実態を知らないうろんな話があってですね。それを残す会っていうのがあって、ずっと話してくれるんですけど、自分がそんなに分かっていなかったから勉強になったですね。

最近の講演会で明治大学の山田朗さんって方がすごく分かりやすく話してくれたんですけど、1923年ですね関東大震災、1920年韓国併合。その前に日露戦争。日露戦争から日本が朝鮮を植民地支配をして植民地戦争を起こして、それをやった軍人が2~3年して帰ってきて、首謀者が、「官」(?) がですね、「朝鮮人ほっとくまい」(?) っていうあれを出して、自警団に伝えたって言うそういう風な*** (?) になっております。で、僕の問題意識は、僕自身が不勉強で、ということですね、勉強した結果をどう残すか、伝えるかって言うテーマをもってまして前回も話したんですけど、権力に対する人間の闘いと、忘却に対する記憶の闘いに他ならない。忘却に対する記憶の闘いということ、僕自身も70過ぎてますけど、さっきも紹介ありましたけど、NHKドキュメント映像、映画それとそれを読むための本、なかなか僕も本を読み切れないんですけど、映像からインパクト受けること多いんですけど、その映像の紹介とそれに関わる本の紹介をもって、中高生相手のもの(?) にしたいと思っています。

もう一点。たまたま出た「砂川事件、伊達判決を生かす会」の裁判闘争が今真っ最中ですね。はじめてこの日は地方裁判所に行って参加したんですけど、その報告会合めて7月1日にありました。原告88歳の土屋源太郎さん、スガさん(?)、坂田さん。砂川事件自体漠然と名前は知っていますが、聞けばその実態が分かったのが、2000何年かの米軍の文書公開ですね。マッカーサーと裁判長がやってて、特別抗告したじゃないですか。これをですね、それは分かって勉強して伝えたいんですけど、メディアが伝えないんですね。もう一回メディアにもって行くんですけど、そういう過去にあって、まったく米国の意向で最高裁の伊達判決潰しですね。その今民事訴訟と言う形でやってるんですけど、なんでメディアが伝えないのか、それこそがわれわれ知らなかった戦後を知らなきゃいけないと思っています。でちょっと前に放送法問題があってやりましたけど、その時に本質はスルー(?) しています。メディアが公文書にあったことをちゃんと報道して残すと言うことが大切だと思います。(1:04:53)

● R.S. (女性) 85歳になるんですけど、今日の資料の3ページの右側とそれから9ページに右側と10ページの下の方にRS、女性って書いてあるのが私なんです。私はカネミ油症事件、55年前に北九州の方で起きたカネミ油症事件、ここにいらっしゃる方、おそらくみなさんご存じだと思うんですけど、ダイオキシンを直接食べた人たちがいるんですね。その方たちの支援に豊島の清掃工場の反対運動をして、すぐそばで高い煙突の向上反対の運動をしたこと、ダイオキシンに関わって被害者を支援して55年以上になるんですけど、最近化学物質は世代を越えるということで、私たちがやった結果もあるんですけども、次世代影響ということで国が初めて食べなかった人の世代の結果を報告しています。まだまだ全然ダメなんですけど。エピジェネティックという遺伝子のことまで。やっとな国が動き出してわたしたちはそのことで、一生懸命やってるところなんです。けどもまああのそれどころみんなものを考えながら集まってくださってるのでやってきたわけなんですけど。私は人類の半分の男性性のかっていうものよりも、やっぱり平和的な女性性の方が大事だと思ってジェンダーをやったんですけど、カネミがあったり、*** (?) があったり、エコロジーの方に移って行って、ずっとそれでやってきたんですけど、わたしは最近すごくうれしいです。実はたいした発見じゃなかったのかもしれない、でも、大きな気付きだったのは、胎児を守る胎盤って言うのは、男性の遺伝子で出来ているんです。男性の精子が行って胎児が出来ますよね。その胎児を守る胎盤は男性の遺伝子が支えてたってことを知って、生命のものとところは男性と女性は平等に協力してたんだな、と思って、ああ良かったって、なんかホッとしているのが今の現状です。(次ページへつづく)

資料④ 第3回むのたけじ反戦塾(2023年7月6日)の記録 (6)

ま、とにかく私は、日本女性が出て行かなきゃだめだなんてすごく思ってるものです。今、私は何か胎盤は男性の遺伝子できていていうこと、今いくつか書きましたけど、そういうことまで、この中で興味のある方いらっしゃるかわかりませんが、生かされてるのうちの根源というのは、結構ちゃんと化学物質だとか、開発だとか、製造とかそういう全然、次元の違うところで、ちゃんと生命系の中でできてたんだ。中村桂子さんから励まされて私、とっても良かったこのことに気づいて、もっと大きなジェンダーの問題なんかじゃなかったって、今ホッとしているところです。すみません。(1:08:10)

● M.A. (女性) こんにちは第1回から3回まで参加をさせていただいています。あの立川市から参りました。昨年6月に市議会議員選挙に出まして、今、丸1年市議会議員を務めているところなんですけども本当に様々な問題が立川でも出ています。前回もPFASのこととかも、オスプレイのこととかも言ったんですけど、PFASのこと、本当に何十年も前からアメリカでは問題になってたところですよ。よく国が動いてきたって言うところ、やっぱり国の動きは本当に遅いって言うのは思ってます。やっぱり政治の責任って言うのはとても大きいと思ってるので、もうすぐ衆院選もあるかと思いますが、なんとか政権交代、ま、どこがなればいいのかって言うところはあると思うんですけどもやっぱり一人一人自分事として何ごとも考えていかなければ変わっていかないんだな、ということも思ってます。私も本当に生活者の一人として政治に関わっていかうという決心をしたわけなんですけども、やっぱり大きく動かすのは政治ってところで若い人たちがもっと関心を持ってくれるにはどうしたらいいのかということも日々考えてるところです。今日もよろしくお祈りします。(1:10:21)

● S.A. (男性) 立川から来ました。私も最近関心をもっているのはPFASとか、陸上自衛隊のオスプレイの立川飛行場への飛来の問題に関心をもっていて、PFASは、アメリカ、米軍の横田基地が汚染源じゃないかと言われてますし、オスプレイが立川飛行場に飛んでくるようになってはじめて、オスプレイが落ちてくる危険、落ちてくるんじゃないかという不安とかですね。そういうものを感じるようになって、頭ではわかってても、なかなかわからない沖縄の人たちの思いが少しでも我がこととして自分ごととして分かってきたような気がします。

で最近気になったことが2つあって、1つは不確かなことで恐縮なんですけどネットメディアみたいなのが立川について「基地の町というイメージがありますか」というなんかアンケートをネット上でやっていて、それに半分以上はイメージがないみたいな話だったと思うんですけど、回答の中で「立川にはもう基地がないからな」とかですね、横田基地の立川なんですけど、一部は、自分たち、そのアンケート取ってる側の人たちは「自分たちは外から来たんで、やっぱり基地のイメージがなかったから」とか書いてあるんですけど横田基地が立川にあって、横田基地には在日米軍司令部があって、で日米の共同指揮所ですかね、今ミサイル防衛と一緒に指示を出すとか、有事があれば、日米の行動指令部になる場所が横田基地にあって、沖縄が有事の時とかありますけど、沖縄と一緒に横田基地が一番先に沖縄と一緒に狙われる場所なんです。だからそういう意味で言うと、いまこう準有事みたいな雰囲気になってきてるのに対して立川の人達っていうのは強い危機感を確かに持たなきゃいけないはずなのに、その基地のイメージがないとか、もう基地無いでしょうってことに、危機感がなくなって、最近危機感を覚えました。

同じような関係で、元防衛研究所の幹部で、今大学の先生をしてる人と話をした時に、そのまあ「今の状況だと、中国が台湾に攻め込んだら、日本も巻き込まれるんじゃないですか」「巻き込まれる危険がありますよね」と話した時にそのひとが「巻き込まれるとか、巻き込まれないって議論、それは昔の議論だ。日本はもうすでに最前線に立っているんだ、もう日本は逃げられないんだよ」という認識なんです。そういう認識を持っていまの防衛政策が進められるんだって言うことを考えると、やっぱり怖いなという印象、認識なんですけどもちました。(1:14:48)

● T.I (男性) 埼玉の浦和、北浦和の近くに住んでいます。今までちょっと、全部聞かせてもらってですね、非常にいろいろと皆さんの考え方分かりました。最後に阿部さんが言われてたんですけど、ちょっと気になったんですけど日本が最前線にいるから逃げるかどうかっていったんですけどね。僕はね、そこは非常にね、おかしいと思うんです。日本でいま一番世論を牛耳っているのは、「中国と北朝鮮が攻めてきたらどうするか」それでね、日本中がもうほとんど麻痺してますよね。ぼくはもう、憲法改正される可能性もあると思うんです。その動きがね、攻めてきたら軍備をもって闘うしか無いじゃないか、そういう論議には、ほぼなっている。僕は今、安保法制の違憲訴訟で闘ってるんですけど、やられたら憲法変えられちゃうんじゃないかという危機感を持っている。それはなぜ危機感を持ってるかという攻めてきたらどうするって言われたら、「攻めてくるはずがない」と僕は言わなきゃいけない。それと同時にですね、そういう危機感があるんだしたら、なぜね、話し合いをやらないのかと思ってますけどね。そういう世論を僕は作らなきゃいけないと思ってますよ。日本には在日朝鮮人や韓国人が60万人近くいるんですよ。近く僕は今度また武野さんと一緒にね、近くの総連の人と話しに行きますけどね。中国人もそうですよ。留学生だったら留学生。アジアの人とどれくらいコンタクトを取れるかってことが問われていると思います。北朝鮮のミサイルが怖い怖いって言ったらさ、北朝鮮の人が攻めてくるから、ミサイル怖いからどうしたらいいか話せばいいじゃないですか。そういうことをやってないと僕は思います。具体的にね。

今はね、日朝国交回復でしょ。戦後78年戦後補償やってないですよ、78年間。こんなひどい国ないですよ。全然。その原因なんだと思いますか？ たった30名ぐらいの拉致問題ですよ。30名位の拉致問題で「北朝鮮酷いよ」と。簡単に言えば、60万ぐらいの人が北朝鮮から、この間お話ししましたけど、北朝鮮から、朝鮮から引っぱり込んできたわけですよ、戦争で。それで6万人殺してますよ。それからいま一緒にやろうよっていわれたんですけど、関東大震災の問題ね。これ大正の時の問題なんです。今やらなきゃいけないのは、僕ら、北朝鮮と話し合いをする、中国と話し合いをする、そのための市民運動をやらなきゃいけないと思います。そこにつなげていかないと、今の世論をひっくり返さないとだめですよ。あなたが勉強しているだけでね、攻めてきたらどうするって言ったら、攻めてきたら困るんですよ。それしかないですよ。それにはどうするかっていったら、話し合いする。だって北朝鮮だって、中国だって、戦争したら困るってみんな市民は分かっていますよ。そこをどう手を組んで、今のデタラメな北朝鮮の指導者ね、中国の指導者、岸田のデタラメね。脅かしといて軍備をどんどん増やせて。これは憲法違反なんです。憲法なんかもう無視ですよ。議員さんがいるけど、今ね、増税してるでしょ。あれは憲法違反なんです。納税者基本権っていうのがありましてね、必要最小限度以上の税金を軍備に使っちゃいけないんですよ。そこを国会ではやられてない。

攻めてきたらどうするって言われたら、攻めてきたら困るわけですよ。だから軍備を増やすという状況があるんで、是非この間もちょっとお話ししましたけど、よろしくおねがいします。(1:19:23)

※この後の話し合いについては、「反戦塾」当日までに書き起こしを進め、追加資料とします。

※また、憲法を考える映画のホームページ (<http://kenpou-eiga.com/?p=2875>) から、追加資料をダウンロードできるようにします。

※この資料④の冒頭にも書きましたが、「発言記録」の中の間違いやなども修正していきますので、お気づきの方はお教え下さい。

させるのが商売ですもの。
現実はどうであったか?

パール・ハーバー攻撃で対米英戦争の始まったあの二月八日、朝日新聞の東京本社
は「ゼンシャイン、スグシユツシャセヨ」のウナ(至急)電報で全社員を招集した。いつ
も午前十一時ごろに社員たちが顔を揃えて夕刊作りに着手する光景が、その日は午
前八時前に出現した。しかし何も始まらなかった。会社幹部の意見開陳も、社員たちの
討議もゼロ。社内の空気はひどく緊張していたが、光景も輪転機の音も前日通りを繰り返
返して前日通りに仕事が進んだだけでした。会社の幹部たちは「大東亜戦争開始」のシ
ョックで不安になり、とにかく全社員を集めて、その人たちに囲まれて自分らの不安を
薄めたかったのだろうか。

一九四五年三月一〇日夜に米軍のB29の大軍に東京下町一帯が爆撃されて一〇万人が
死んだと推定された翌日の朝、焼けただけた廃墟はまだまだ高熱を帯びたまま朝日のす
ぐ近くで身もだえしているのに、社内には新聞社なら当然あるはずの行動は全く発生し
ていなかった。

「沖繩戦新聞」の衝撃

運命の一九四五年八月、その一〇日に鈴木貫太郎内閣は「ポツダム宣言を受諾して降
伏する」と連合国軍へスイス経由で最初の通知を行った。相談事項を一つだけ添えて。

「天皇制は守られるか」と。その返事が連合国軍から届いた。「天皇制その他みな日本国
民自身が自分で決めることだ」と。天皇を取り囲んでいた権力者たちは、天皇制が残れ
ば、付随して自分らも残れると打算していたであろう。その時の彼らの目には、国家も
国民も映ってはいなかったであろう。彼らは、連合国軍からの返事を見て両論に分かれ
た。「この返事だと天皇制は守られない」と「いや、守られるだろう」と。

意見が分裂した騒ぎで、ポツダム宣言受諾の件が外部へ漏れた。そのニュースが朝日
新聞の政治部のデスクへ届いたのは二日の午後二時一〇分ごろでした。政治部の隣
席が社会部、そこに私が居て見ていた。ギョギョという波紋に続いて、ひそひそ話が四
方に走っていった。反応はそれだけだった。自分の国の完全降伏という事実を知っても、
何か大声で反応する新聞社員は一人もいなかった。

結局は面白そうな方を選んだ。そしたら河合部長が「ところで君の給料は今いくら
だ?」と言った。報知の月給は六五円だったが、一〇円を自分でプラスして「七五円
だ」と言った。「それじゃ一〇円をプラスして月給八五円にしよう。できたら、あすか
らでも出社して働いてほしい」で終わりでした。履歴書も書かず健康診断もなし、これ
ほど物わかりが良く物ごとをあつさり運べる朝日新聞社なのに、戦時体制下の社内ム
ードは何ともぎこちなく、こわばって自縄自縛のみに陥ったのは、なぜか。

私が朝日新聞社で働いたのは、一九四〇年の二月から一九四五年八月まで四年九か
月だった。この間に一九四二年には国外に出た。今村軍団(仙台の第二師団、今村均大將
を司令官に将兵二万人で編成)によるジャワ上陸作戦(三月一日に西バンタム湾)に従軍し、
その作戦のあとジャカルタ支局勤務となり、翌年一月に東京に帰任した。東京では社会
部の遊軍として働いた。遊軍とは、軍隊ではゲリラ作戦の要員で、新聞社では特定の官
公庁の記者クラブなどに所属しないで、なんでも自由な取材活動ができました。私の場
合は、社会面で扱う政治記事が専門みたいになった。当時はもう約七〇年の過去になっ
たけれど、いま思い返しても、妙だったな、変だったなと首をかしげることがある。

朝日は、入社してみてもわかったが、万事に品のよい会社でした。社員の人格を重んじ
ていた。太平洋戦争が始まって間もなく、従軍記者に対する前線手当に関する会計課か
らの連絡が口伝えに伝えられてきた。「金額は一日四〇円、月額一二〇〇円。前線
では行動の計画や乗り物などで軍の世話になることが多いだろう。それだけに金品その
他の必要なことでは、決して軍の世話にはなるな」。

当時の新聞社で大学卒の新入社員の月給は五〇円。一二〇〇円の金額は、東京二三区
内で平家建てのこぢんまりした住宅一戸を買えた。そして戦場の前線では買う品も売る
店も、たぶんゼロに近い。社員を深く思いやったつもりの前線手当は、各従軍記者に一
か月だけ適用させて、次の月からは記者の支払った実費をみな本社で負担すると改めら
れた。そこで問わねばならぬ。社員たちをそこまで重く受け止めている新聞社ならば、
日本社会に重大な情勢が発生したら、社長や経営幹部が、事態に対処する「わが社の方
針」を決定して、それを全社員に伝え、それを社員たちがどう受け止めるか突き合わせ
て「わが社の方針」を読者大衆に伝えるのが当然ですね。だって新聞社は、横文字を用
いて言えばコミュニケーション産業だ。情報を相互に伝達して、社会に相互理解を成立
民族に語り続けているではないか。——「問題の本質をごまかしたり、すり替えたりし
てはいけません。常に問題の本質と真つ正面から取り組んで、やるべきことをやり抜か
ないといけないよ、その努力を続けられれば、きつと活路が拓ける」。

「沖繩戦新聞」の衝撃
 運命の一九四五年八月、その一〇日に鈴木貫太郎内閣は「ポツダム宣言を受諾して降伏する」と連合国軍へスイス経由で最初の通知を行った。相談事項を一つだけ添えて、「天皇制は守られるか」と。その返事が連合国軍から届いた。「天皇制その他みな日本国民自身が自分で決めることだ」と。天皇を取り囲んでいた権力者たちは、天皇制が残れば、付随して自分らも残れると打算していたであろう。その時の彼らの目には、国家も国民も映ってはいなかったであろう。彼らは、連合国軍からの返事を見て両論に分かれた。「この返事だと天皇制は守られない」と「いや、守られるだろう」と。
 意見が分裂した騒ぎで、ポツダム宣言受諾の件が外部へ漏れた。そのニュースが朝日新聞の政治部のデスクへ届いたのは一二日の午後二時一〇分ごろでした。政治部の隣席が社会部、そこに私が居て見ていた。ギョギョという波紋に続いて、ひそひそ話が四方に走っていった。反応はそれだけだった。自分の国の完全降伏という事実を知っても、何か大声で反応する新聞社員は一人もいなかった。

戦争体制が進むと「一億一心」とか「一致団結」とか強調されるけれど、人間関係は時と共にこわばって冷たくなった。「ほしがりません、勝つまでは」と生活の心得を力説しても、生活物資の配給・統制の状況下では各個人のエゴが強まって、対立を増やした。その当時、私は世帯数が五〇〇の町内会の副会長をしていたが、物資の配給でちよっぴりでも不公平のあやまちをしたら、大騒ぎになった。何でもない顔つきで、実は生活内容をお互いに監視していた。家庭生活でも夫婦や親子のしつとりとした温かな心づかみまでが、外部からの刺激でひび割れを起こした。その根本の理由・原因は戦争そのものから来ている事実を、私は若い人たちに語り伝えねばならぬ。
 戦争を直接にやる主体は軍隊であるが、軍隊の組織を決定づけているものは命令と服従だけだ。第三の選択肢は存在しない。一般の国民には、戦争での命令権が与えられていない。求められているものは服従だ。服従だけだ。そして、もう一つ、これは身を戦場に置いて体感した恐怖ですが、戦場では「相手を殺さなければ、こちらが殺される」という待ったなしの二者択一に絶えずさらされている現実です。それが戦後の民衆の朝夕の暮らしにまで、じわりじわりと投影していく。これが戦争であって、こんな方法

させるのが商売ですもの。
 現実はどうであったか?
 パール・ハーバー攻撃で対米英戦争の始まったあの二月八日、朝日新聞の東京本社には「ゼンシャイン、スグシユツシャセヨ」のウナ(至急)電報で全社員を招集した。いつもなら午前十一時ごろに社員たちが顔を揃えて夕刊作りに着手する光景が、その日は午前八時前に出現した。しかし何も始まらなかった。会社幹部の意見開陳も、社員たちの討議もゼロ。社内の空気はひどく緊張していたが、光景も輪転機の音も前日通りを繰り返して前日通りに仕事が進んだだけでした。会社の幹部たちは「大東亜戦争開始」のシヨックで不安になり、とにかく全社員を集めて、その人たちに囲まれて自分らの不安を薄めたかったのだろうか。
 一九四五年三月一〇日夜に米軍のB29の大軍に東京下町一帯が爆撃されて一〇万人が死んだと推定された翌日の朝、焼けただれた廃墟はまだまだ高熱を帯びたまま朝日のすぐ近くで身もだえしているのに、社内には新聞社なら当然あるはずの行動は全く発生していなかった。

その日の夜に編集局の各部ごとに部会が開かれた。社会部の場合、そこに経営幹部は姿を見せず、社会部長が「みんな思うとおりのことを語り合ってほしい」と挨拶して、自分の意見は言わなかった。そんな有様では、社員がつべこべ言えるわけがない。まるで通夜みたいなムードで、唯一、一人だけ「読者を裏切り続けたことのケジメをつけなさいで、社屋に掲げている国旗と社旗を星条旗に変えるだけで、このまま新聞の発行を続けたら、同じあやまちを「層大きく繰り返すことになる。ケジメを考えようではないか」と言い続けていた。体は小さいのに声の大きいその記者の意見に、反対者は居なかったが、賛成者も居なかった。
 社会部会は次の一三日にも同じ有様で催された。そして日本政府がポツダム宣言を受け入れて降伏したことを知りながら、天皇のラジオでの降伏放送のある一日まで、日本中の新聞の紙面は、それまでの戦争状態そのままでした。
 この項目では個人生活に及ぼす戦争の影響を検討することにしてきた。その角度から諸経路に検討を加えた。そして、戦争による影響では組織でも個人でも共通だとわかった。それでいい、新聞社ですら、このような状態であった、とそれを述べてしまった。

「言ってくれ」と言った。それ事件だ、と他の新聞社では自動車で出掛ける時に、報知の記者たちはトコトコと市電で出掛ける有様だった。それで要望を五つほど言った。三日後に編集局長から、また呼ばれた。「社長と熱心に語り合ったが、今の経営状態では何ともならない、と皆断られた。君はこんな会社には愛想を尽かして辞めるだろうな」と言った。私に報知が貧乏会社だから退社するなんていう気持ちは全くなかったのに、局長がそういつたら、それを耳にした何人かの社員が「武野武治は退社するそうだ」と噂を流した。

二日後に朝日新聞から電話が来た。「私は河合という社会部長だが、あなたと会いたい。午後三時に日本劇場の地下の喫茶店に来てくれないか」と言った。話す声が穏やかで優しくかったから、出掛けた。「報知を辞めるそうだが、朝日に来てほしい」と単刀直入だ。簡単な会話を交わしながら、私の胸の中では二つのものが対立していた。貧乏な会社を去って貧乏でない会社に移るのはオレらしくない、という思いが一つ。も一つは初対面の河合部長のゆつたりとした人柄の魅力、こんな人と一緒に働いたら面白いのではなからうか、という思い。

朝日は、入社してみてもわかったが、万事に品のよい会社でした。社員の人格を重んじていた。太平洋戦争が始まって間もなく、従軍記者に対する前線手当に関する会計課からの連絡が口伝えに伝えられてきた。「金額は一日四〇〇円、月額一二〇〇円。前線では行動の計画や乗り物などで軍の世話になることが多いだろう。それだけに金品その他の必要なことでは、決して軍の世話にはなるな」。

当時の新聞社で大学卒の新入社員の月給は五〇〇円。一二〇〇円の金額は、東京二三区内で平家建てのこぢんまりした住宅一戸を買えた。そして戦場の前線では買う品も売る店も、たぶんゼロに近い。社員を深く思いやったつもりの前線手当は、各従軍記者に一月だけ適用させて、次の月からは記者の支払った実費をみな本社で負担すると改められた。そこで問わねばならぬ。社員たちをそこまで重く受け止めている新聞社ならば、日本社会に重大な情勢が発生したら、社長や経営幹部が、事態に対処する「わが社の方針」を決定して、それを全社員に伝え、それを社員たちがどう受け止めるか突き合わせて「わが社の方針」を読者大衆に伝えるのが当然ですね。だって新聞社は、横文字を用いて言えばコミュニケーション産業だ。情報を相互に伝達して、社会に相互理解を成立

新聞社の内部にすら、真の会話が欠落
中国から東京に帰って間もなくの師走に、職場を報知から朝日の社会部に移した。当の私がそれを希望も予想もしていなかったのに。他人に語ったことはなかったが、話題として披露しよう。

中国から帰国して間もなく、私は浅草界隈に足繁く通った。浅草には徳川以来の伝統工芸を伝える職人たちの町があった。ところが戦争体制で貴金属や絹糸などは贅沢品として使用を止められ、職人たちは困っているが、怒りや悲しみのもって行き場がないと嘆いているという話を聞いた。それこそは保存するべきホントであり、将来の復活のためにも記録しておかねば、と取材を続けて社会面に連載した。その記事を読んで「これを書いた者をわが社にほしい」と言った幹部が朝日に居たそうだが、そんなことは私は無関係だった。

ある日、報知新聞編集局の社会部のコーナーで私がボカンとしていると、編集局長が大声で私の名を呼んだ。局長の所に行ったら「わが社が貧乏なので、記者諸君は取材活動でいろいろ不便しているようだな。わしが社長と交渉するから、改革の要望を幾つか

* 12ページから10ページに遡る形で上段右から左下、下段右から左下の順で読み進み下さい。

結局は面白そうな方を選んだ。そして河合部長が「ところで君の給料は今いくらだ?」と言った。報知の月給は六五円だったが、一〇〇円を自分でプラスして「七五円です」と言った。「それじゃ一〇〇円をプラスして月給八五円にしよう。できたら、あすからでも出社して働いてほしい」で終わりでした。履歴書も書かず健康診断もなし、これほど物わかりが良く物ごとをあっさり運べる朝日新聞社なのに、戦時体制下の社内ムードは何ともぎこちなく、こわばって自縄自縛のていど陥つたのは、なぜか。

私が朝日新聞社で働いたのは、一九四〇年の二月から一九四五年八月まで四年九月だった。この間に一九四二年には国外に出た。今村軍団(仙台の第二師団、今村均大將を司令官に将兵二万人で編成)によるジャワ上陸作戦(三月一日に西バンタム湾)に従軍し、その作戦のあとジャカルタ支局勤務となり、翌年一月に東京に帰任した。東京では社会部の遊軍として働いた。遊軍とは、軍隊ではゲリラ作戦の要員で、新聞社では特定の官公庁の記者クラブなどに所属しないで、なんでも自由な取材活動ができました。私の場合は、社会面で扱う政治記事が専門みたいになった。当時はもう約七〇年の過去になったけれど、いま思い返しても、妙だったな、変だったなと首をかしげることがある。